

# チベット仏教における ニンマ派の現代の教学について

高 松 宏 寶

(クンチョック・シタル)

## 0. はじめに

筆者はこれまで、チベット仏教の近代化と僧院における教学についての研究を重ね、『現代密教』第25号（2014（平成26）年、智山伝法院）においては、チベット仏教ゲルク派僧院の教学に関する研究成果を「現代チベット僧院における仏教教学の現状 ―ゲルク派の教学をめぐる一」と題する論文として発表した。

智山伝法院の教学再考というテーマの追究が発端となり、数々の視点から考察を繰り返してきたが、20世紀以降、大きな変化にさらされてきたチベット仏教僧院の教学の現状と今後の有り様は、筆者にとっての研究すべきテーマであると同時に、読者にとっても何らかの参考となれば幸いである。

この論文では、チベット仏教最古の宗派であるニンマ派における現代の教学について、南インドのナムドルリン僧院（Namdrooling Nyingmapa Monastery）<sup>(1)</sup>の教学に関する現地での調査に基づき、論じていきたい。

## 1. ニンマ派六大本山

ニンマ派には、六大本山（六大僧院）―カトク僧院（Ka thog dgon pa 1159）、ドルジェタク僧院（rDo rje brag dgon pa 16世紀初頭）、ペルユル僧院（dPal yul dgon pa 1665）、ミンドルリン僧院（sMin gdrol

ling 1676)、ゾクチェン僧院 (rDzogs chen dgon pa 1685)、シェチェン僧院 (Zhe chen dgon pa 1735) 一がある<sup>(2)</sup>。1959年にチベットの政治と社会が大きく変わって以来、これらの六大本山は次々にインド・ネパールに再建され、学問寺として、学問／実践の双方を守り伝えている。

亡命先に再建されたニンマ派の大僧院の中でも、北インドのミンドルリン僧院、ネパールのシェチェン僧院、南インドのナムドルリン僧院などが名高い。ナムドルリン僧院は、ペルユル僧院の流れを受け継いで亡命地に再建された大僧院である。これらの大僧院は、それぞれの伝統や流儀を守り伝えるために、計画的に再建された。

## 2. チベット仏教史—旧訳（ニンマ）と新訳（サルマ）—

チベットへの密教経典の請来時期の違いが、チベット仏教の各宗派の違いにつながっている。密教経典がチベットに請来された時期は大きく二段階に分かれる。9世紀までにインドから請来され、チベット語に翻訳された「旧訳（ニンマ）」と、9世紀半ばのランダルマ王 (Glang darma 9世紀) による廃仏の後に請来され、翻訳された「新訳（サルマ）」の二つである。

チベットへの仏教伝来は、古代チベットを統一したソンツェンガンボ王 (Songtsen Gampo 7世紀) の時代のことである。

ティソン・デツェン王 (Trisong Deutsen 8～9世紀) の時代には、王がインドより招聘したパドマサンバヴァ (Padmasambhava 8～9世紀)、シャーンタラクシタ (Śāntarakṣita 725-788) らが、チベットに仏教を弘めるとともに、サムイエ寺を拠点に経典の翻訳にあたった。8世紀のティソン・デツェン王らによる国家翻訳事業においてチベット語に翻訳されたこれらの密教経典が、旧訳である。そしてこの旧訳の密教経典に依拠する宗派が、旧訳古派 (ンガギュル・ニンマパ)、すなわち、ニンマ派である。

パドマサンバヴァは、ウッディヤーナ (インド北部、現在のパキスタン) 出身の密教行者であり、チベットへの仏教弘布を妨げる霊的存在の

調伏や、仏教とボン教の対立を抑えるために、チベットに招かれた。ニンマ派はパドマサンバヴァを宗祖としている。

一方、新訳は、アティーシャ (Atiśa 11世紀ごろ) の時代以降に、リンチェン・サンポ (Rinchen Zangpo 958-1055)、ドクミ (Drogmi 993-1050)、マルパ (Marpa 1012-1097) らによって、インドから請来され、翻訳された密教經典による。この密教經典に依拠するのが新訳派 (サルマパ) である。チベット仏教のニンマ派、カギュ派、サキャ派、ゲルク派の四大宗派のうち、ニンマ派以外の三つの宗派は新訳派である<sup>(3)</sup>。

ニンマ派とカギュ派は比較的、教義に共通性がある。ニンマ派の主な見解はゾクチェン (Dzogchen) である<sup>(4)</sup>。カギュ派はマルパ・ロツァワ (翻訳官) を宗祖とする宗派であり、マルパがインドから持ち帰った多くの密教經典に基づいている。カギュ派の密教実践は、マハームドラー (Mahāmudrā) が特によく知られている。

サキャ派とゲルク派はインド・ナーランダ僧院由来のインド大乘仏教の教学と実践を重視し、般若学、中観学、仏教論理学などの学修に力を入れる宗派である。

そのうちのゲルク派は、四大宗派のうち最後に成立した宗派で、7世紀以来インドからチベットにもたらされた顕密のさまざまな經典を整理し、実践体系と論理を整えた学僧ツォンカパ (Tsong khapa 1357-1419) が宗祖である。ゲルク派の教学については『現代密教』第25号において論じたとおりである。なお、ゲルク派では、ガンデン僧院 (Ganden Namgyeling)、セラ僧院 (se ra dgon pa)、デプン僧院 (bras spungs dgon pa) の三大僧院が三大本山として知られている<sup>(5)</sup>。

以上のように旧訳古派と新訳派には違いがあり、チベットの宗派間でも教義や実践方法には若干の違いがある。

### 3. ニンマ派の教義の特長—ゾクチェン—

ニンマ派の教義の特長のひとつに「ゾクチェン (r.Dzogs chen、大究竟)」の教えがあり、その名はよく耳にするかと思われるが、日本にお

いてはゾクチェンに関する研究は少数であり、筆者にとって内容を説明することは容易ではないが、ここでは平松敏雄氏の複数の論文を参考にしてゾクチェンについて簡単に触れたい。

ニンマ派には「九乗の宗義」という教義体系がある。ニンマ派の教義の大成者ロンチェンパ（Longchen pa 1308-1363）による九乗とは次のとおりである。小の乗である①声聞乗②縁覚乗③菩薩乗、中の乗である④クリヤー乗⑤ウパ乗⑥ヨーガ乗、大の乗である⑦マハーヨーガ乗⑧アヌヨーガ乗⑨アティヨーガ乗である。④から⑧はそれぞれ新訳派のプトゥン（Bu-ston 1290-1365）によるタントラの「四分類法（四種タントラ）」の所作タントラ、行タントラ、瑜伽タントラ、無上瑜伽父タントラ、無上瑜伽母タントラに対照される。アティヨーガ乗がゾクチェンであり、これは（1）セムデ（sems sde 心部）（2）ロンデ（glong sde 界部）（3）メンガクデ（man ngag sde 秘訣部）に分かれる。セムデは主体すなわち心の真理、ロンデは客体の真理を説き、メンガクデはそれらの一体化を説いているように見える<sup>(6)</sup>。

一方、ゲルク派の学僧トゥカン（Thu'u bKwan 1737-1802）の『一切宗義・善説水晶鏡』には「すべての現れは心である。セムデは智慧から現れたものである。ロンデはすべての外的世界のあり方である。メンガクデはその二つの双入の手段の教えである」といった主旨の解説が見られる<sup>(7)</sup>。

チベット仏教界においては、ゾクチェンの思想に対して様々な見方があり、意見が分かれている。ゾクチェンには中国禅の影響があるとする見方がある一方、それを否定する見方もあり、容易には結論付けられない。正しく結論付けるためには、チベットの僧侶も禅についての研究を重ねる必要があろう。なお、平松氏は中国禅のゾクチェンへの影響を指摘している。

#### 4. インド・ネパールに再建されたニンマ派大本山

ニンマ派は7～8世紀に成立したものの、12～13世紀まで大きな僧院や



教団が作られることはなかった。この宗派は各自の実践に重きを置き、僧院建設や教団化に関心を持たない傾向があったためである。ようやく12世紀になってカトク僧院、16世紀にドルジェタク僧院、17世紀にペルユル僧院、ミンドルリン僧院、ゾクチェン僧院、18世紀にシェチェン僧院が開創された。この時期以降、ニンマ派の他の僧院も次々に多く建立された。これらの六大僧院にはそれぞれ、シェダ (bshad grwa) すなわち学問(教相)を修める「学修院」とドゥプダ (sgrub grwa) すなわち実践(事相)を修める「行院」が設けられた。学修院が設けられている僧院が大本山とされている。これらの大僧院開創にあたっては、ダライ・ラマ五世(1617-1682)のニンマ派への理解と支援によるところが大きかった。

1599年、チベットの政治と社会が大きく変化し<sup>(8)</sup>、ダライ・ラマ十四世をはじめ一万人近くのチベット人がブータン、ネパール、インドに亡命した。チベット人は、自らの生命や生活だけではなく、仏教の伝統を守るために国外に逃れてきたのだと自負しているため、亡命地において僧院を建設することは彼らにとって当然のことであった。そして、前述のとおり、インド・ネパールに大僧院を再建し、学問寺として学問と実践の双方を守り伝える場となったのである。

ニンマ派の大僧院には学修院と行院の機能が設けられ、僧侶たちが教相と事相を修めるわけであるが、本論では南インドのナムドルリン僧院を中心に、ニンマ派僧院の教学と実践方法の現状について論じたい。

## 5. ナムドルリン僧院の開創期

今回主に取り上げるナムドルリン僧院(Namdroling Nyingmapa Monastery)は、東チベットカム地方に1665年に開創されたペルユル僧院の伝統を受け継ぐ大僧院である。ダライ・ラマ十四世とインド政府の支援により、ペルユル僧院座主であったペノル・リンポチュ(Pe Nor Rinpoche 1932-2009)と六百人の信徒らが<sup>(9)</sup>、1961年、南インド、カルナータカ州バイラクッペを訪れ、この地に定住したことに始まる。

ペノル・リンポチュらは、若者への近代教育とチベット語教育の必要性を強く認識していた。チベットが容易に侵略されたのは、当時のチベットでは近代教育が行われず、世界情勢を知る機会がなかったためだという強い反省を有していたからである。

インド政府の全面的な協力により、1962年、学齢期の子どもたちのために小学校 (Elementary School) を開設し、チベット語、チベット文化に関する教育、インドの教育システムに基づく普通教育が行われた。この時期のインドにおける亡命チベット人の子どもたちのための教育については以前論じたが、ここでも短く説明をしておくと、この小学校は亡命チベット社会で初めての私立学校 (Private School) であり、開設当時の生徒数は二、三〇人であった。その後、中学校 (Junior High School) も開設し、インドの義務教育である小学校五年、中学校三年の八年制教育が整った<sup>(10)</sup>。この小学校・中学校の生徒のうち、将来僧侶となる者たちは普通教育とチベット語教育、英語教育を受けるとともに、法要・儀礼などを学び、僧院の伝統を身に着けた上で、その後に正式に僧院に入門することが想定されていたのである。

ちなみに、法要・儀礼を担当する僧侶は、「ガル・ティク・ヤン (仏教仮面舞踊 (チャム)、マンダラ製作、声明)」や、「ブー・ドゥン・ドル (ドゥンカル (法螺貝)、ギャリン (中笛)、カンリン (人骨笛) を吹く。ブクチャ (鉞) を鳴らす。太鼓をたたく。)、そして、「チュー・ルン・ティー (チュー行、風のヨーガ (トゥムモ)、転移 (ポワ))」をおこなう。これらは僧院の伝統を継承し、維持・運営する手段なのである。

この地に、僧院 (grwa tshang タツァン) が開創されたのは、1963年のことである。開創されたこの僧院はナムドルリン僧院 (Namdroling Nyingmapa Monastery) と名付けられた。その主な目的は、出家者がペルユル僧院の伝統を学ぶ場を設けることと、過去の学僧たちの教えの流れを未来につないでいくことである。ペノル・リンポチュらは、時代の急激な変化の中、自分たちの未来に不安を感じながら多くの苦勞を重ね、僧院の諸設備を整えていった。

その後、徐々に僧院の法要、設備、学修が整い、1978年に学修院を開設するに至った。ナムドルリン僧院の学修院である「ンガギェル・ニンマ学院 (Ngagyur Nyingma Institute)」の開創である。ニンマ派大僧正ディンゴ・キェンツェ・リンポチェ (Dilgo Khyentse Rinpoche 1910-1991) <sup>(11)</sup>らの指導と、座主ペノル・リンポチェらの努力の賜物である。学修院への最初の入学者は十五人ほどで、当初は非公開の九年制コースとしてスタートした。当時、この学修院の入学者は、上述の中学校卒業者とインド・ネパールの他のニンマ派寺院出身者のみに限定されていた。2010年にはこの学修院は千人以上が顕教と密教を兼修し宗学と仏教学を学ぶ場となった。なお、僧院全体では約八千人の僧尼が所属し、そのうちの四千人ほどが常時僧院内で活動している。

## 6. ナムドルリン僧院の学修院の学修カリキュラム

学修院の開創から数年間の経験に基づいて、ディンゴ・キェンツェ・リンポチェを初めとするニンマ派の大僧正たち、ナムドルリン僧院のラマたちが何度も話し合いを行い、1987年、カリキュラムと学修内容の見直しが行われた。さらに、1998年には理事会も設けられ、学修院の教授たちと大僧正らが検討を重ね、科目とカリキュラムを定めたが、現在にはさらに改訂された三つのカテゴリーから成る内容となっている。

カリキュラムを概観すると、インド仏教の重要な経典・論書とニンマ派の学僧らの論書の両方を学ぶように配置された九学年制となっており、根本テキストと補助テキストをともに用いて学ぶようになっている。

九年間の学修期間は、三学年ごとの三つのカテゴリーに分かれる。最初の三年間で①「下位の経典」に分類される一般の経典・論書と戒律、中観を学び、次の三年間で②「上位の経典」に分類される如来蔵と般若学などの経典・論書を、最後の三年間で③「密教経典」に分類される密教と宗学であるゾクチェンを学ぶ。

各学年では、主専攻 (major) と副専攻 (minor) の二つの専攻に配置された科目を学修する。主専攻にはインド仏教の主な経典・論書、密

## チベット仏教におけるニンマ派の現代の教学について

教、ゾクチェンが含まれ、副専攻には仏教史、チベット史、文法学、仏教論理学入門 (rtags rigs タクリク) などが含まれる。一学年ごとに進級試験が行われ、口頭と筆記の両試験において合格点を取る必要がある。

### 【カリキュラム一覧表】<sup>(12)</sup>

| 学年   |     |   | 根本テキスト                                       | 著者                                     |
|------|-----|---|----------------------------------------------|----------------------------------------|
| 第一学年 | 主専攻 | 1 | 『三律儀の設定 (ドムスム・ナムシャ)』                         | ンガリ・パンチェン                              |
|      |     | 2 | 『入菩薩行論』                                      | シャーンティデーヴァ                             |
|      | 副専攻 | 1 | 『チベット文法三十頌』                                  | トンミ・サンポータ                              |
|      |     | 2 | 『仏教論理学入門』                                    | ケンボ・ツドゥ                                |
|      |     | 3 | 『根本有部律儀』                                     | ナーガールジュナ                               |
|      |     | 4 | 『殊勝聖讃 (仏陀の特長の称賛)』<br>(viśeṣastava)           | ウドバタシッダスヴァーミン<br>(udbhaṭasiddhasvāmin) |
| 第二学年 | 主専攻 | 5 | 『ニンマ仏教史』その1                                  | ドゥジヨム・リンポチェ                            |
|      |     | 1 | 『中観莊嚴論』                                      | シャーンタラクシタ                              |
|      | 副専攻 | 2 | 『賢者の方法への入門 (ケーパー・ツルラ・<br>ジユクパー・ゴ)』(俱舍論と思想入門) | ミバム・リンポチェ                              |
|      |     | 1 | 『如意の蔵の精髓<br>(イーシン・ズー・ドゥブドゥ)』(宗学)             | ミバム・リンポチェ                              |
|      |     | 2 | 『チベット文法三十頌』                                  | トンミ・サンポータ                              |
|      |     | 3 | 『ニンマ仏教史』その2・3                                | ドゥジヨム・リンポチェ                            |
|      |     | 4 | 『チベット政治史』(ティソン王以前の時代)                        | ドゥジヨム・リンポチェ                            |

|      |     |   |                                     |                |
|------|-----|---|-------------------------------------|----------------|
| 第三学年 | 主専攻 | 1 | 『入中論』                               | チャンドラキールティ     |
|      |     | 2 | 『中論』                                | ナーガールジュナ       |
|      |     | 3 | 『四百論』                               | アーリヤデーヴァ       |
|      | 副専攻 | 1 | 『集量論』                               | ディグナーガ         |
|      |     | 2 | 『真実を設定する見の智慧<br>(ドン・ナムゲ・シェラブ・レルディ)』 | ミバム・リンポチェ      |
|      |     | 3 | 『カーヴィヤーダルシャ (詩作の鏡)<br>(Kāvyaḍarṣa)  | ダンディン (Daṇḍin) |
|      |     | 4 | 『チベット政治史』<br>(ティソン王からランダルマ王の時代)     | ドゥジヨム・リンポチェ    |
|      |     | 5 | 『ニンマ仏教史』 その4                        | ドゥジヨム・リンポチェ    |
| 第四学年 | 主専攻 | 1 | 『阿毘達磨俱舍論』                           | ヴァスバンダウ        |
|      |     | 2 | 『量評釈 (仏教論理学)』 第二章                   | ダルマキールティ       |
|      | 副専攻 | 1 | 『入菩薩行論』 第九章                         | シャーンティデーヴァ     |
|      |     | 2 | 『弁中辺論』                              | マイトレーヤ/アサンガ    |
|      |     | 3 | ベルユル僧院歴代座主の伝記                       | ラマ・ジャンベル・サンボ   |
|      |     | 4 | 『カーヴィヤーダルシャ (詩作の鏡)<br>(Kāvyaḍarṣa)  | ダンディン (Daṇḍin) |
|      |     | 5 | 『チベット政治史』 その2・3                     | ドゥジヨム・リンポチェ    |
|      |     | 6 | 『ニンマ仏教史』 その5                        | ドゥジヨム・リンポチェ    |

チベット仏教におけるニンマ派の現代の教学について

|      |     |   |                                     |              |
|------|-----|---|-------------------------------------|--------------|
| 第五学年 | 主専攻 | 1 | 『究竟一乗宝性論』                           | マイトレーヤ/アサンガ  |
|      |     | 2 | 『空性に応じた獅子の声<br>(トントウン・センゲー・ンガロ)』    | ミバム・リンポチェ    |
|      |     | 3 | 『決定的な認識の灯明<br>(ンゲシェ・ドゥメー)』          | ミバム・リンポチェ    |
|      |     | 4 | 『量評釈 (仏教論理学)』 第一章                   | ダルマキールティ     |
|      | 副専攻 | 1 | 『大乘莊嚴經論』                            | マイトレーヤ/アサンガ  |
|      |     | 2 | 『見解を成立させるための解説<br>(タ・ドゥブ・シェン・ジェー)』  | ボトゥル・テンペー・ニマ |
|      |     | 3 | 『ニンマ仏教史』 その6                        | ドゥジョム・リンポチェ  |
| 第六学年 | 主専攻 | 1 | 『現觀莊嚴論』                             | マイトレーヤ/アサンガ  |
|      |     | 2 | 『量評釈 (仏教論理学)』 第三章                   | ダルマキールティ     |
|      | 副専攻 | 1 | 律經 (波羅提木叉)                          | 仏説           |
|      |     | 2 | 『法法性分別論』                            | マイトレーヤ/アサンガ  |
|      |     | 3 | 『ニンマ仏教史』 その7・8                      | ドゥジョム・リンポチェ  |
| 第七学年 | 主専攻 | 1 | 『律經本頌』                              | グナブラバ        |
|      |     | 2 | 『量評釈 (仏教論理学)』 第四章                   | ダルマキールティ     |
|      |     | 3 | 『功德の宝なる蔵の歡喜の雨<br>(ヨンテン・ズー)』         | ジグメ・リンパ      |
|      |     | 4 | 『秘密心髓タントラ』                          | サマンタパドラ      |
|      |     | 5 | 『一切の密意をまとめた総合經<br>(チド・ゴンパ・ドゥバ)』 第一章 | 秘密主金剛手       |

|      |     |   |                                         |               |
|------|-----|---|-----------------------------------------|---------------|
| 第八学年 | 主専攻 | 1 | 『律経本頌』                                  | グナブラバ         |
|      |     | 2 | 『見解の教訓の蔓（メンガク・タテン）』                     | バドマサンバヴァ      |
|      |     | 3 | 『顕現の本尊成就（ナンワ・ラドゥブ）』                     | ロンゾム・マハーパンディタ |
|      |     | 4 | 『如意宝珠の蔵<br>（イーシン・リンボチェイ・ズー）』            | ロンチェンパ        |
|      |     | 5 | 『秘密心髄タントラ』                              | サマタンバドラ       |
|      |     | 6 | 『一切の密意をまとめた総合経<br>（チド・ゴンパ・ドゥバ）』第二章      | 秘密主金剛手        |
| 第九学年 | 主専攻 | 1 | 『大究竟心性安息（ゾクバ・チェンボ・セムニー・ギェルソー）』          | ロンチェンパ        |
|      |     | 2 | 『大究竟自解脱の三要点（ゾクバ・チェンボ・ランドゥル・コルスム）』       | ロンチェンパ        |
|      |     | 3 | 『八教説の解説（カギエー・ナムシエー）』                    | ミバム・リンボチェ     |
|      |     | 4 | 『色究竟天に昇る階段という生起次第（キエーリム・オクミン・ドゥペー・テムケ）』 | ジグメ・リンパ       |
|      |     | 5 | 『禪定の四種の鉅（要）たる教戒<br>（ソグドム・セルシエ・メンガク）』    | バトゥル・リンボチェ    |
|      |     | 6 | 『一切の密意をまとめた総合経<br>（チド・ゴンパ・ドゥバ）』第三・四章    | 秘密主金剛手        |

このカリキュラムには、中観学、般若学、仏教論理学が取り入れられており、ニンマ派において最終的に目指す宗学であり密教であるゾクチェンを学ぶために、戒律と仏教論理学の必要性を重視しているという印象を受ける。また、優れたニンマ派学僧のテキストを学ぶ科目が多く、そのようなテキストの有無がカリキュラムの構成に影響を与えているように思われる。

なお、学修院の入学予定者は、この九年コースに入る前の一年間を自習期間として過ごす。前半の六か月間では、チベット語、文法などを学ぶとともに、仏教論理学の問答形式に慣れるために、問答流儀である「ド

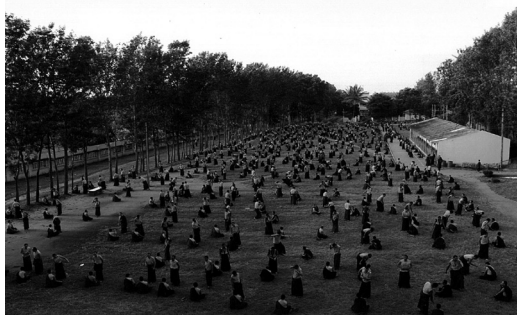
ウータ」や仏教論理学入門を学んで論理学のシステムを習得する必要がある。後半の六か月間では「加行 (Ngondro)」修行に入る。尊い仏教を学ぶにあたり、悪業を浄化し、心を訓練して、仏教を学ぶ動機を堅固なものとするためであると考えられている。それはまた、僧侶としての生活に慣れるための準備でもある。加行の内容は伝統や流儀によって異なるが、ゾクチェンのジグメ・リンパ (Jigme Lingpa 1729-1798) による「ロンチェン・ニンティク (Long chen ning tik)」の加行では、①「帰依の行」②「発菩提心の行」③「金剛薩埵百字真言念誦」④「マンダラ供養」⑤「五体投地」そして、⑥「上師瑜伽 (グルヨーガ)」⑦「転移 (ポワ)」⑧「フーム字の瞑想」を各一〇万回、阿闍梨の指導に従って行なう。これらの成満後、九年間の学修コースに入ることになる<sup>(13)</sup>。

カリキュラムに従って学ぶ学生僧の一日を見てみよう。午前には、主任教授による主専攻のテキストについての講義 (一時間半) を受けた後、副講師 (skyor dpon キョルブン) による復習クラスを受ける。午後には、副専攻のテキストに関する一時間の講義を受け、夕方には一時間ほどをかけて問答をし、暗記によってその内容を身につける。

ちなみに、かつてニンマ派では問答はほとんど行われていなかったが、現在では学修の手段として重要な位置を占めている。昔のチベットでは、問答形式での学修について賛否が分かれていた。学僧やラマによって意見が異なり、ニンマ派の教義には問答形式での学修は適さないという意見も多かった。そのため、ゲルク派などと異なり、かつては問答を取り入れた学修方法を採用していなかったのである。

以上の九年間の学修コースを完全に修了し、僧侶としての行状や品行をよく保てる者には、本人の意志に基づいて3~4年間の個別研究期間が与えられる。あるいは、別のニンマ派の寺院や仏教センターなどにおいて教師として活動する者もいる。





学生僧の問答

この個別研究期間を終え、すべての学修を達成したと僧院から評価された者には、「ケンポ（mKhan po、僧院長位、密教哲学博士、Degree of the Doctor of Tantric Philosophy）」位<sup>(14)</sup>が授与される。「ケンポ」はゲルク派の「ゲシェー」に近いものであり、後進の僧侶の指導に当たる人材である。日本仏教界における僧侶の階級や教師資格と同様、教師資格として認定された学位であると言える<sup>(15)</sup>。ナムドルリン僧院では、2009年までに約五百人が九年間の学修コースを修了し、百五人が「ケンポ」位を授与された。



学修院第8学年生（2010）

## 7. ナムドルリン僧院の行院

### ——「禪定光明堂 (Samten Oser Ling)」

チベットの伝統では、学修を終えた後には行の実践に入るのが一般的であり、僧院もケンポに対して三年三か月の行に入ることを推奨する。

ナムドルリン僧院では、1985年に、「禪定光明堂 (Samten Oser Ling)」と名付けられた「ケンポ」位取得者が実践行を行う行院を開創した。行に入る前には、資格のある阿闍梨から「ワン・ルン・ティー・スム」すなわち灌頂 (ワン)・口伝 (ルン)・講伝 (ティー) を受ける必要があるが、これについては後述する。

この行院において行者はいかなる修行を行うのかと言うと、主に「三根本 (ツァ・スム)」すなわち上師 (ラマ)・本尊 (イダム)・空行母 (ダーキニー) への祈願と成就法の修行を行うのである。行者本人が十一面観音や馬頭などの中から本尊を選び、その本尊を含めたツァ・スムに対して、流儀に従い、厳格に、専心して実践行を行う。

これらの実践行の修行を完全に終わると、最高位の「ドルジェ・ロツプン (金剛阿闍梨)」位が与えられる。<sup>(16)</sup>これはニンマ派のすべての伝統の法要・儀礼、灌頂などを授ける資格を得た者の証しであり、ナムドルリン僧院から「ドルジェ・ロツプン」位を授与された者は、2010年までに二十六人ほどである。

それぞれの学修課程を満了した学修院修了者、行院修了者、ケンポ、ドルジェ・ロツプンなどの多くは、インド、ネパール、チベット、ブータン、台湾、香港、欧米などに設立された、ニンマ派の僧院の別院やセンターに指導者として派遣される。全ニンマ派には、大小、九〇ほどのセンターなどがある。彼らは、自らの使命を仏教と宗派の伝統を世界において継承していくことだと考えており、布教や教化を行い、大乘仏教と密教の教えを世界の人々に伝えるために活動している。

## 8. チベット仏教における口伝と講伝

チベット仏教では、ニンマ派に限らず、伝授を重視する。大乘仏教全般や顕教においては、実践のために経典・論書を学ぶ際には、通常、事前に「シェー・ルン（講義・伝授）」を受ける。たとえば、ツォンカパの『ラムリム・チェンモ』を修行したいと望む者は必ず『ラムリム・チェンモ』のルンを持つラマからシェー・ルンを受ける。つまりこの意味することは、ツォンカパ以来今日まで『ラムリム・チェンモ』のシェー・ルンが綿々と受け継がれてきたということである。

密教の教えにおいては、まず、弟子たちは阿闍梨から灌頂、口伝、講伝を授かる必要がある。灌頂の儀軌に則った灌頂を受け、口伝は一言一句そのままに耳で聞き、講伝に際しては、阿闍梨は自分の解釈を入れずに、伝統のとおり弟子に伝えることが重視される。こうしたやり方によって、各宗派や流儀に伝えられている伝統を衰退させずに守り伝えていくことになるのである。ちなみに、灌頂と口伝を伝授するラマは、経験豊富なラマである必要から、高齢なラマであることが多い。講伝を授けるラマは比較的若年でも良いとされている。

チベット仏教圏では、僧侶や教師は以下の「九つの特長<sup>(17)</sup>」を備える必要があると考えられている。

①学修と行の実践の目的は「チェー・ツー・ツォム・スム」すなわち、  
「チェー（説）」：説法、

「ツー（論）」：違う見解についての誤解を解くための論争、

「ツォム（著）」：得た智慧や知識の著述

を得ることであり、この三つ（スム）は、自らの伝統と仏教の教えを他者に伝え、教化するための大切なツールである。すなわち、自分が得た正しい見解を他者に伝え、布教するための三つの手段である。

②さらに「ケー・ツン・サン・スム」を備えるべきであるとされる。すなわち、

「ケー（賢明）」：仏教全般や宗派の教えの内容を巧みに知る豊かな知識

を持ち、

「ツン（精進）」：精進により社会の倫理・道徳や受けた戒律を守り、

「サン（善なること）」：仏教の特長である思いやりの心や非暴力の精神  
を身につける

この三つである。自分が仏教の教えと実践を学んだのは、他者を導く者となるためであるからこそ、「ケー・ツン・サン・スム」を備えた人となるべきなのである。

③そして、「シェー・ドゥブ・レー・スム」もまた備えるべきであるとされる。すなわち、

「シェー（語る）」：学問としての伝統の学識を持ち、

「ドゥブ（行の体験）」：自分自身が実践行を行い体験し、

「レー（行い）」：仏教の活動や事業を、教団、社会、他者のために行うの三つである。

チベット仏教の僧侶らは以上の九つの特長を目標としている。

## 9. まとめとして

以上、ナムドルリン僧院での現地調査での知見を中心に、現代のニンマ派教学におけるカリキュラムと僧侶の階級と教師の資格について述べてきた。ミンドルリン僧院やシェチェン僧院でも九年制学修カリキュラムが設けられ、流儀ごとの細かい相違はあるものの、大筋では同様の学修システムが機能している。

現代のニンマ派僧院においては、他の多くのチベット仏教の僧院と同じく、若い僧侶志望者すなわち小僧は中学校までの普通教育を受けることが理想的だと考えられている。そして、普通教育修了後、一年間、僧侶としての準備の学修に努めた上で、学修院の九年制学修コースに入る。学修院の課程を修了した後は、3～4年間の個別研究期間において個人研究に力を入れて学修を行うか、あるいは教師として布教や教化のために教える活動を行う。また、さらに体験的な実践行を修行することを希望する者は行院において三年三か月にわたる密教の行に入り、この行を達

成した者が金剛阿闍梨となる。以上のように、現在のニンマ派僧院では、学問と実践の両方に向かう方針がとられている。

チベット仏教界における仏教学の近代化と僧院の近代化は、日本におけるそれらに比べ遅れていると言えるだろう。日本仏教界では明治期に普通学の導入が検討された<sup>(18)</sup>わけであるが、日本仏教界のその時期のプロセスを、目下チベット仏教界は進んでいるのが現状である。しかしながら、政治亡命を余儀なくされ、突如として現代に直面せざるを得なかった状況において、異郷という環境や限られた設備の中で文化と教学を生かし、守っていかうと懸命に努力を重ねていることは事実で、長い年月にわたって伝えられてきた伝統と文化を、前向きに存続する活動に積極的に取り組んでいる姿勢を痛感させられた。とは言え、釈尊などが説かれた経典や論書についての知識や情報をひたすら得ることに傾注する教学から、社会の現実に対処を迫られる課題、価値観に対して、自ら論を立てられる方向性を持てるようなカリキュラムの構築が求められよう。そのためには、自らの専門分野のみに専心することで客観性が劣る現状を打破し、より広い分野を俯瞰できるよう履修の構成を見直し、文献の研究や個人研究にも重きを置くことに配慮する必要がある、と筆者は考える。

末尾ながら、ナムドルリン僧院にて調査にご協力いただいた同僧院職員ロップン・ウギェン・テンジン師に感謝いたします。

## 註

- (1) *sNga 'gyur mtho slob chen po'i bslab pa mthar son gyi mdzad sgo thengs drug pa'i dran deb* (=NNI Dran Deb) ; published by Ngagyur Rigzod Editorial Committte (Ngagyur Nyingma Institute) , Bylakuppe, 2010, pp.8-20.
- (2) *Cho Yang*; The Voice of Tibetan Religion and Culture; Department of Religion and Cultural Affairs; Dharamsala, India, 1991, pp.29-34. および *The Nyingma School of Tibetan Buddhism: Its Fundamental and History* by Dudjom Rinpoche, translated and edited by Gyurme Dorje with the collaboration of Matthew Kapstein; Wisdom Publication- Boston, 1991, pp.733-739.

チベット仏教におけるニンマ派の現代の教学について

- (3) 頼富 本宏 「チベットの密教」『チベット仏教』 岩波講座—東洋思想—11、1989年、289～321頁
- (4) *The Practice of Dzogchen*; by Longchen Rabjam; introduced, translated and annotated by Tulku Thondup and edited by Harold Talbott; Snow Lion Publication, New York, 1989, pp.35-88
- (5) 高松 宏寶 「現代チベット僧院における仏教教学の現状—ゲルク派の教学をめぐって—」『現代密教』第25号、智山伝法院、2014年
- (6) 平松 敏雄 「ニンマ派と中国禅」『チベット仏教』 岩波講座—東洋思想—11、1989年、263～287頁。および平松 敏雄 『トゥカン 『一切宗義』 ニンマ派の章』(西藏仏教宗義研究 第3巻) 東洋文庫、1982年
- (7) *Grub mtha' thams cad kyi khyungs dang 'dod tshul ston pa legs bshad shel gyi me long* (=Thu'u bKwan grub mtha') ; Thu'u bKwan blo bsang chos kyi nyi ma; Kansu Mi rigs dpe skrun khang, 1984, pp.69-73.
- (8) 高松 宏寶 「チベット亡命社会における仏教の近代化」『現代密教』第22号、智山伝法院、2011年、179～183頁
- (9) Ecclesiastical Rule – Relinquishment in Exile ?, Eeling Wong Tandzin *Tibet Journal*, Vol.XXIX, No.4, Dharamsala, 2004; pp.43-74.
- (10) *Brief History of Rinchen Terzod*, Rigzod Editorial Committee, Namdroling Nyingma Monastery, Bylakuppe, 2010; pp.71-93.
- (11) *Schools of Tibetan Buddhism*-Encyclopaedia of Tibetan Buddhism Series, Agnihotri K.Ch, Anmol Publication Pvt.Ltd, New Delhi; 2012, pp.1-32.
- (12) NNI Dran Deb; Bylakuppe, pp.35-39.
- (13) Chagdud Tulku; Ngondro – Commentary; compiled from the teachings; by Jane Tromge, Pilgrims Publishing, Varanasi, 1995, pp.57-122.
- (14) NNI Dran Deb; Bylakuppe, pp.35-39.
- (15) 阿部 宏貴 (貴子) 「近代日本の仏教教団における「教学」—その用例と「教師」—」『現代密教』第26号、智山伝法院、2015年、33～54頁
- (16) *Cho Yang*: The Nyingma Tradition; The voice of Tibetan religion and culture; Department of Religion and Cultural Affairs, Dharamsala, 1991, pp. 24-44.
- (17) チベット語 (ローマナイズで示す) は以下のとおりである。① 'chad/ rtsod/ brtsom-gsum ② mkhas/ btsun/ bzang-gsum ③ bshad/ grub/ las-gsum
- (18) 阿部 貴子 「明治期における真言宗の教育カリキュラム—普通学の導入をめぐって—」『現代密教』第24号、智山伝法院、2013年

〈キーワード〉 ニンマ派の教学 チベット仏教の教学 チベット僧院の仏教学と宗学